

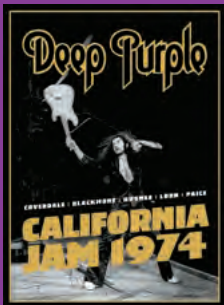
映像で観る70年代のリッチー・ブラックモア

マシンヘッド・ライブ〜カリフォルニア・ジャム〜レインボー期のMV

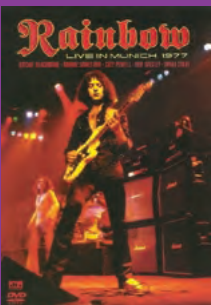
文：近藤正義



1



2



3

70年代のロック・バンドの映像は、有名バンドであつてもなかなか存在するものではない。一般家庭で鑑賞するビデオの普及は80年代の半ばまで待たねばならず、その理由は再生装置が普及していないことには映像を商品として販売することは不可能ということだったのだ。従つて運よく映像が残っていたとしても、それは何らかの記録用であつて、音楽的なプロ・シヨットや満足な音源など望めるはずもない。そのような状況で、運よく残っていたリッチー・ブラックモア関連のフルサイズのコサート映像は第2期

ディープ・パープルの『マシンヘッド・ライブ (Machine Head Live 1972)』**1**、第3期ディープ・パープルの『1974カリフォルニア・ジャム (California

Jam 1974)』**2**、レインボーの『ライブ・イン・ミュンヘン 1977 (Live in Munich 1977)』**3**の3点である。

『マシンヘッド・ライブ』は第2期のラインナップで唯一残っている整った映像だ。1972年3月1日、デンマークのコペンハーゲンにあるKB-Hallenにて地元のデノンマーク・ラジオTVが収録。モノクロ映像でモノラル音源ということさえマイナス要素とは思えないほど、興味深い内容だ。アルバム『マシン・ヘッド』のレコーディングがこの前年である71年12月、発売が同月の72年3月であることから、アルバム・プロモーションのヨーロッパ・ツアーが始まったばかりという、バンドとして精神的にも体力的にも最高のコンディションを

備えた時期の記録。同年の8月がライブ・アルバム『ライブ・イン・ジャパン』を生んだ初来日公演であり、ここで観ることのできるパフォーマンスは来日公演の時とほぼ同様の展開であり、似た佇まいを持っている。ただし会場が狭いためだろうか、リッチーのギター破壊はなし。

そして『1974カリフォルニア・ジャム』は第3期のラインナップによる、74年4月6日カリフォルニア州、オントリオ・モーター・スピードウェイで行われた、ABC主催による野外フェスティヴァルにヘッド・ライナーとして出演した時の模様。新しいラインナップになって初のアルバム『紫の炎』を同年2月に発売したばかりという、これも最高のタイミングでバンドをとらえた映像である。

フレッシュな時期だけに、メンバー全員の結束力が高い。リッチーがステージ上のTVカメラを破壊し、アンプを炎上させた伝説のライブがほぼフルサイズで残っていることにも感激。

レインボーの『ライブ・イン・ミュンヘン 1977』は、77年10月20日、ミュンヘンにおけるライブ映像。76年12月の来日時とは、ベースがボブ・デイズリー、キーボードがデヴィッド・ストーンに代わっている。77年の1月より始まった『バビロンの城門』のレコーディングはメンバー交代のゴタゴタにより長期化。これは決められていたツアーを消化するためにレコーディングをいったん中断、新しく招集されたメンバーによって行われたライブである。リッチーは前々日のウイーン公演

1972年3月1日、デンマークのコペンハーゲンにあるKB-Hallenでディープ・パープルのライブ中のリッチー。弾いているブラック・フィニッシュのフェンダー・ストラトキャスターはメイプル・ネックに貼りメイプル指板の1968年製。シリアル・ナンバーは221737だ。ヘッドのロゴは太文字で「WITH SYNCHRONAIZED TREMOLO」。トロモロのアームは極太タイプに改造／交換されている。
Photo by Jorgen Angel/Redferns

で会場のマネージャーに怪我をさせたことで逮捕／勾留され、この日のライブ開始直前に釈放されたという裏事情。本人もメンバーも微妙な精神状態だったと思われるが、演奏はベストな出来栄え。このような好調なライブの映像がフルサイズで残されていたのは奇跡に近い。リッチーは一連の鬱憤を晴らすかのよう

に、ブラックのストラト・モデルを粉々に破壊している。ただし、いずれの映像もカメラワークには疑問がある。ギター・ソロの時に他の楽器プレイヤーがアップになっていたりするのには誠に残念だ。しかし、まだ録画という作業に慣れていない時代なので仕方がない。70年代のコサートをフルサイズでとらえたビデオは他にはないが、80年あたりからは曲単位でPVが作られているので、グラハム・ボネットやジョー・リン・ターナー時代のヒット曲は、アテレコとはいえ動く彼らとして鑑賞することができる。